

## 本校の「看護研究」の動向

中根 洋子\*, 阿部 幸恵\*\*

key words : 看護研究, 研究領域, 研究方法, 研究対象, 分析手法

### I. はじめに

平成9年の看護教育カリキュラム改正を受け, 本校では看護研究を専門分野の基礎看護学に位置づけ(1単位30時間)を3年次に展開している<sup>1)</sup>. 看護師を目指すものとしてその専門性を高めていくために, 看護研究のプロセスを体験学習することは意義のあることである. また本校では3~5人のグループ研究としていますが, 1年間かけて1つのことを協力して成すことで, 連携の必要性や大切さを実感することができ, 看護師として働くために必要なことも学べていると考えている.

看護研究の授業が始まり3年目に, その授業概要をまとめた<sup>2)</sup>. 今回は10年を経過したので, 学生の看護研究の動向についてまとめ, 報告する.

### II. 調査目的

1999年から2007年度までの本校看護研究論文集を調査し, 研究内容とその特徴を明らかにするとともに, それらの年次的経過も明らかにする.

### III. 調査方法

<調査対象>1999年度~2007年度(過去9年間)の本校の学生の論文集に掲載されている論文211題を対象とした.

<調査方法>調査対象とした論文について以下の4つの項目について調査を行った.

研究領域: 母性, 小児, 基礎, 成人, 老年, 精神, 在宅, 災害の8看護学に加え, 学生の実態, 看護管理, その他の11領域に分類した.

研究方法: 岡本和士著「看護研究はじめの一步」<sup>3)</sup>

を参考に, 文献研究, 事例研究, 論述的研究, 調査研究, 実験研究の5つの通称に分類した.

なお, 文献研究については二次資料の検索状況についても検討した.

分析手法, およびその分析方法:

岡本和士著「看護研究はじめの一步」<sup>3)</sup>を参考に, 質的, 量的, 複合的の3つに分類し, さらに質的, 量的についての分析方法を明らかにした.

<分析方法>単純集計

<倫理的配慮>報告内容に論文執筆者名, およびテーマを記さず, 全て数字で処理した.

### IV. 結 果

調査対象とした211題のうちケーススタディ12題をのぞいた199題を分析対象とした.

#### 1. 研究領域数(表1)

分析した199論文で最も多い研究領域は「母性看護学」の44題で全体の31%であった. 次に多かったのは「老年看護学」の27題, 「小児看護学」が26題, 「成人看護学」が24題, 「基礎看護学」が19題で, この5領域で全体の70.4%を占めていた.

年次的に見ると「母性看護学」「小児看護学」「成人看護学」「基礎看護学」の4領域についての論文は, 9年間を通して毎年学生がテーマとして取り上げた領域であった. 一方「老年看護学」は全体的には2番目に多かったが, 0から6題とばらつきがあった. また「災害看護」は2006年に初めて学生がテーマとして取り上げた領域であった.

\* 東京医科大学看護専門学校専任教員

\*\* 東京医科大学病院卒後臨床研修センター助教

表1 研究領域

分野	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	総数
母性	2	5	7	4	5	5	4	6	7	44
小児	3	1	4	1	5	1	4	2	5	26
基礎	3	1	3	3	2	1	3	2	1	19
成人	2	3	4	4	2	1	3	3	2	24
老年	1	5	3	5	3	6	0	3	1	27
精神	1	4	3	1	0	1	2	2	1	15
地域	2	0	1	1	0	1	1	0	0	6
管理	0	0	1	2	0	1	1	0	2	7
学生の実態	0	3	0	0	3	2	1	2	1	12
災害	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
その他	4	3	4	3	1	3	0	0	0	18
計	18	25	30	24	21	22	19	21	19	199

## 2. 研究方法 (表2)

分析した199論文で最も多い研究方法は「調査研究」の96題で、全体の48.2%であった。次に多かったのは「文献研究」の68題で、この2つの研究方法が全体の82.4%を占めていた。

年次的に見ると「調査研究」は2004年度までは常に一番多い研究方法であったが、2005年度を境に「文献研究」が一番多くなった。また「事例(症例)研究」「論述(理論)研究」「実験研究」は2005年度以降0題であった。

## 3. 文献研究の二次資料 (表3)

文献研究69題の研究対象は、「医学中央雑誌」が60(のべ数)と最も多かった。また複数の二次資料を使っている学生は少なかった。

年次的に見ると2002年度以降「最新看護索引」は減少し、「医学中央雑誌」は2005年度以降は増加していた。また、「雑誌記事索引」は2006年度から対象とされていた。

## 4. 分析手法、およびその分析方法 (表4) (表5)

最も多い分析手法は「質的」の99題で、全体の49.7%であった。次に多かったのは「量的」の89題、全体の44.7%で、この2つの研究方法が全体の94.5%を占めていた。年次的には1999から2001年度、2003年度、2004年度は「量的」が「質的」を上回っていた。しかし2005年度以降は「質的」の方がかなり多くなり、同時に「複合的」がなくなった。

また、量的研究の分析手法は、単純集計60(以

下のべ数)、基礎統計量が17で、全体の62.1%を占めていた。次いでt検定、 $\chi^2$ 検定などの推定統計量による分析であった。特に、検定をしない単純集計については、量的研究が多かった1999から2004年度でも、多くの学生が使用していた。

## V. 考 察

### 1. 研究領域について (表1)

9年間を通して毎年研究されていた領域の中で、「母性看護学」が44題と最も多く全体の22.1%を占め、次いで「小児看護学」が26題で13.1%であった。

本校では「母性看護学Ⅰ」の講義で概論を学び、「母性看護学Ⅱ」で妊娠・分娩・産褥期にある女性と新生児の健康状態に応じた看護を学ぶ。それまで正常な妊娠・分娩ばかりを想像していた学生にとって、「母性看護学Ⅱ」で学ぶ障害を持つ新生児や、死産などについては衝撃を受けるようである。そして3年生の実習でNICUに行き、さらに衝撃を受けていることが実習記録やカンファレンスでの発言からわかる。また妊娠、出産など将来自分自身の体に起こる可能性があり、母性看護学に興味、関心が高いことも予想される。以上のことから看護研究の研究領域に多く選ばれていたのではないかと考える。

「災害看護」は2003年頃から日本看護協会でも力を入れてきて、災害支援についての検討も繰り返されていた。看護師国家試験には第93回から出されている。さらに2004年に起きた新潟県中越地震や

表2 研究方法

	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	総数
文献研究	3	1	1	8	5	4	13	16	16	68
事例研究	5	5	10	0	1	4	0	0	0	27
論述的研究	0	0	1	2	0	0	0	0	0	1
調査研究	6	17	18	14	15	13	6	5	3	96
実験研究	4	2	0	0	0	1	0	0	0	7
計	18	25	30	24	21	22	19	21	19	199

表3 文献研究の二次資料

対象 (文献検討のみ)	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	総数
医学中央雑誌	1	0	0	8	6	4	12	15	14	60
雑誌記事索引(国立国会図)	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
最新看護索引	0	1	1	7	4	2	2	1	1	19
日本看護協会 Jdream II	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
その他	2	1	1	1	2	0	2	0	1	10
延べ数	3	2	2	16	12	6	16	18	17	91

表4 分析方法

	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	総数
質的	9	6	12	11	8	7	13	16	17	99
量的	7	16	16	10	13	14	6	5	2	89
複合的	2	3	2	3	0	1	0	0	0	11
計	18	25	30	24	21	22	19	21	19	199

表5 分析方法

	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	総数
単純集計	6	14	10	11	5	7	2	4	1	60
基礎統計量	0	0	7	2	3	2	2	0	1	17
t検定	1	6	4	1	3	4	2	0	1	22
$\chi^2$ 検定	0	2	1	4	0	3	1	1	0	12
相関分析	1	2	1	0	2	0	1	0	0	7
分散分析	0	0	1	0	2	0	1	0	0	4
Z検定	0	0	0	0	0	1		0	0	1
ウイルクソンの順位検定	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
のべ数	8	24	24	19	15	17	9	5	3	124

スマトラ沖地震などに、医療者が関わっている姿が多く報道されるようになった。そのため将来看護職に就く者として、学生は「災害看護」について強く意識するようになったのではないだろうか。今後カリキュラム改正により、本校でも「災害看護」を統合分野の科目の1つとして予定している。そのため、今後、研究領域として増えていくことが予想される。

## 2. 研究方法について (表2)

研究方法の通称については「調査研究」が96題と最も多く、次いで「文献研究」が68題であった。しかし、年次的に見ると2005年度からは、ほとんどが「文献研究」となっていた。その背景には、

2003年5月に「個人情報保護法」が成立し、2005年4月に全面施行されたこと、また2003年度に日本看護協会から「看護師の倫理綱領」が公表されるなど、倫理に関する審査体制が整備されたことがあり、本校でも2005年度から、調査研究の場合の対象は本校学生、また知人の関係病院、患者会、知人、出身校に限定した。そのため2005年度からは、ほとんどの学生が「文献研究」を選んでいるのではないかと推察する。

## 3. 研究対象 (二次資料) (表3)

文献研究69題の研究対象は、「医学中央雑誌」が最も多かった。「医学中央雑誌」はインターネット

から情報を取れるので、本校では1年次後期に「情報科学」講義で、アクセスし、実際に検索を学生が行っている。「最新看護索引」などのように辞書のように調べなければならない資料よりも、IT世代の学生にとって「医学中央雑誌」は、身近な存在になっているのではないかと考える。

#### 4. 分析手法、およびその分析方法（表4）（表5）

前述したように、2005年度から研究方法のほとんどが「文献研究」になり、「調査研究」を行う学生が少なくなった。「文献研究」本来、何度も検証を繰り返し、妥当性を得ていかなければならない。しかし、学生の段階では能力的にも時間的にも難しく、また担当講師も限られた時間内で指導するのは困難であるため、内容分析になったと推察する。「調査研究」については、学生が確実に集計できるような内容の質問紙となるように、講師が指導するようになったため、検定をしなくて単純集計する学生が増えてきたと推察する。

#### VI. おわりに

今回は、看護研究の演習が始まった1999から2007

年度までの看護研究の動向をまとめた。今後は、看護研究の演習をしたことでどのような学びが得られたのか、また卒業後役に立ったのかなど、評価をしていきたい。

最後に、今まで看護研究に携わって下さった諸先生方、図書館司書、事務の皆様から心から感謝申し上げます。

#### 引用参考文献

- 1) 井澤和代, 天野雅美, 山本君子. 本校の「看護研究」の概要. 東京医科大学看護専門学校紀要. 12, 39-45, 2002.
- 2) 岡本和士編集. 看護研究はじめの一步. 東京. 医学書院. 2005.
- 3) 小塩康代, 小笠原ゆかり, 世古美恵子. わが国における過去10年間の看護学教育研究の動向—過去の研究によって貞二された看護学教育研究の問題点や課題の変化—. 日本看護医療学会雑誌. 9(2), 51-57, 2007.
- 4) 日本看護研究学会雑誌発行30周年 [投稿論文の分析]. 38-42, 2008.